

岡山市立中央図書館 企画展示

## 敗戦後の岡山

### 画家・佐藤一章が描き残したスケッチ



2024





#### 戦災後の岡山市街

現在の県庁通りを西へみたところ。遠方中央の建物が中国銀行本店、左端が天満屋百貨店。撮影は矢延眞一郎氏。このプリントは岡山市立中央図書館所蔵のものですが、空が少し切り詰められているようです。

戦後の岡山の文化の復興に計り知れない大きい役割を果たした洋画家、佐藤一章は、敗戦直後の昭和20年秋に、戦災で荒廃した岡山の市街と、そこで生き抜く人々の姿を水彩スケッチに描きました。このたびはそれらについて、岡山市立図書館が所蔵する全点（合計13点）を展示します。

このスケッチが描かれた頃、画家は囑託として籍を置いていた合同新聞（現在の山陽新聞）の紙面へ、「復興 岡山」と題した挿絵付きのコラムを13回にわたって連載していました。その中には図書館に保存されてきたスケッチと主題が重なるものも多く、ここに画家自身が書き添えた短い説明文を手がかりにすれば、画に込められた作者の思いを窺い知ることができるかもしれません。

そこで、このコラムの文をたよりに、戦後のスケッチを読み解いてみることにしました。

岡山市立中央図書館 企画展示

## 敗戦後の岡山 画家・佐藤一章が描き残したスケッチ

<概要>

会期 2024（令和6）年8月8日（木）～9月1日（日）

8月12日（振替休日）を除く、毎週月曜日休館

会場 岡山市立中央図書館 二階視聴覚ホール前 展示コーナー（観覧無料）

岡山県岡山市北区二日市町56番地 電話 086-223-3373

関連行事

歴史講座「佐藤一章の戦後のスケッチを読み解く」

日時 2024（令和6）年8月11日（日） 14～16時

場所 岡山市立中央図書館 視聴覚ホール

定員 60名（当日先着順、聴講無料）

講師 飯島章仁（岡山市立中央図書館学芸副専門監）

# 佐藤一章と戦後のスケッチについて

現在の矢掛町出身の画家、佐藤一章は、東京美術学校（現在の東京芸術大学）で洋画を学び、卒業後は政府が主催する国内最大の美術公募展、帝国美術展（帝展）に出品して活躍します。昭和9年の出品作は特選となり、昭和11年には無鑑査となりました。

しかし太平洋戦争末期の昭和20年には東京が激しい空襲を受けるようになったため、彼は家族とともに都内の東中野から岡山市弓之町へ転居し、合同新聞社（現在の山陽新聞社）へ嘱託として勤めるようになりました。ところが同年6月には佐藤にも応召がかかり、岡山市に家族を残して長崎県大村の部隊へ配属されました。その間に岡山では、6月29日未明の空襲によって中心市街地の大半が焼き払われるという惨事に見舞われますが、弓之町にあった彼の家はかろうじて罹災を免れ、家族も無事でした。

敗戦後、佐藤も除隊となりますが、軍隊生活中に重度のチフスに罹患しており、ようやく10月になって岡山の家族のもとに帰宅することができました。しかし戦後の極度の混乱の中、誰もが毎日の食糧にさえ事欠く状態で、この時期は画家にとっては満足な絵を描くことができず、まして絵など買ってもらえることも困難な苦勞の多い日々であったと推察されます。

この頃の彼は、焼け跡が広がる岡山の市街のあちこちを訪ね歩いて、粗末な画用紙に鉛筆と水彩絵具でスケッチを描いており、そこには復興の歩みが始まったばかりの岡山の街と、そこで生き抜く人々の姿が描き留められています。

彼が生涯を通して描いた膨大な量のスケッチは、その中の多数が彼の出身地に設立されたやかげ郷土美術館に収蔵されており、そこには今回の展示品と同じ時期に描いたとみられる戦後の岡山の街を主題にしたものも含まれています。いっぽう、岡山市立図書館にも戦後のスケッチが13点所蔵されており、これまで図書館などが主催して岡山の戦災を振り返る展示が行われた際には、戦争の惨禍を伝える資料のひとつとして紹介されてきました。

この13枚のスケッチは、いずれも縦が22.5cm前後、横が29.5cm前後のサイズで、少し褐色がかかった画用紙に黒色の鉛筆で輪郭線を描き、水彩で彩色を施しています。画面の端に隙間を見つけて鉛筆で表題が書かれ、「一章」と刻んだ長方形の朱印が捺されています。

このスケッチがもつ戦災の記録としての価値は、これまでに広く認められてきたところですが、本展ではそれに加えて、画家がどのような思いをもってこのスケッチに取り組んだのかということと、それが以後の岡山における文化の復興とどのようにつながって行くかを観点に含めながら、スケッチを読み取ってみたいと思います。

## 参考文献

- 岡山市史編集委員会（編集）『岡山市史 戦災復興編』（岡山市発行、1960年）
- 朝日新聞社大阪本社企画部（編集・発行）『炎と恐怖 あれから30年 岡山大空襲展』（1975年）
- 岡山戦災の記録編集委員会（編集）『岡山戦災の記録 2 昭和二十年六月二十九日』（岡山戦災を記録する会発行、1976年）（カバーのデザインに佐藤一章のスケッチを使用）
- 岡山県総合文化センター（編集・発行）『郷土作家展第12回 佐藤一章展』（1985年）
- やかげ郷土美術館（編集・発行）『やかげ郷土美術館蔵品図録』（1990年）
- 山陽新聞社（編集・発行）『おかやま文化山脈 戦後の軌跡』（1995年）
- 生咲恭仁彦『谷口久吉の文化巡歴』（山陽放送発行、1998年）
- やかげ郷土美術館（編集・発行）『佐藤一章と山光会』（1999年）
- やかげ郷土美術館（編集・発行）『佐藤一章展 没後40年』（2000年）
- やかげ郷土美術館（編集・発行）『岡大特美教室からの波動』（2002年）
- 岡山県立美術館（編集・発行）『戦後岡山の美術』（2002年）
- 山陽新聞社（編集・発行）『伝みらいへ 岡山文化界・聞き書き』（2002年）
- 岡山空襲展示室（編集・発行）『第42回岡山戦災の記録と写真展 -復興期岡山の人々-』（2019年）
- 廣瀬就久（執筆・編集）『佐藤一章 作品と生涯』（岡山県立美術館発行、2022年）



### 「お城付近を望む」

焼けた建物の土台や、ぼろぼろのトタン板のようなものが累々と重なる焼け跡の広がりの向こうに、罹災しなかった古い家屋や、新しく建て直されている家が並び、さらにその先に、遠くの山並みを背景にして小さく見えているのが岡山城の月見櫓です。

月見櫓の右手に大きく聳えていたはずの天守閣は、空襲の激しい火災で焼け失せて、長大な石垣だけが無残に残っています。

現在は岡山市立図書館が建っている場所から北方へ向かって描いたとみられるこのスケッチは、焼け跡の茫洋とした風景を月見櫓を焦点にして統一感のある緊密な構図にまとめ上げており、画家の技量を感じさせます。



### 「天マ屋付近より南方を望む」

右手に一部分だけが描かれている大きい建物が天満屋百貨店です。百貨店の建物の大きい躯体は敢えて一部分だけしか描かず、それより左手にあるやや小さい鉄筋コンクリートの別の建物とで中景をつくり、2つの建物の隙間から児島半島の山並みが遠く霞むように望まれる様子を捉えています。

画面の手前側は表町の商店街だったところで、焼け跡の残骸も広がっていますが、その中に店舗を兼ねた家屋が少しずつ再建されてきています。

山並みの遥かに遠い感じを生かすために、このスケッチでは全体の色調が抑えられています。



### 「月見櫓 残る」

岡山城の本丸にあった創建以来の古い建物の中では、天守の西に位置する月見櫓だけが奇跡的に戦災を免れました。

櫓を西北方向から南東に向かって描いたこのスケッチでは、手前にしっかりと建っている櫓の存在感が、遠くに望まれる山のシルエットとの対比で強められています。少し西から午後の陽が当たっている様子がしっかりと捉えられており、櫓とそれを支える石垣の2面で明るさの対比が生じ、立体感が強められています。

この櫓のある一角が焼けずに残ったことで、地域の古い歴史も眼前に伝わるような感覚を覚え、安らぎを感じる作品です。



### 「中銀を望む」

累々と広がる焼け跡の先に、中国銀行本店の建物の正面が大きく描かれています。これは倉敷の大原美術館の本館を手がけた建築家、薬師寺主計がアールデコ様式を取り入れて設計したもので、渡辺仁の設計による天満屋百貨店本館の建物とともに、戦前の岡山市内では随一の規模の建築でした。

これら鉄筋コンクリート製の建物は、戦災の猛火にあっても躯体はどうか持ちこたえて、焼け跡の中に孤立して聳えていました。戦後はそのようにして焼け残った数少ない建物を使用して都市の機能が維持され、復興が進められました。

このスケッチの画面では、建物は向かって右側（南側）に午前の強い陽光を受けており、手前側（西側）が陰になっています。手前の焼け跡の情景の描写には、うねるような動きが感じられるのに対して、銀行の建物は不動の堅さを示すかたまりのようになって、力強く立ち上がっています。

## 佐藤一章 年譜 (抄)

- 明治 38 年 (1905) 小田郡中川村 (現矢掛町) に生まれる (本名、章)。  
大正 15 年 (1926) 東京美術学校洋画科に入学する。  
昭和 2 年 (1927) 帝国美術展 (帝展) に初入選する (以後連続入選する)。  
昭和 4 年 (1929) 東京美術学校を卒業する。  
昭和 5 年 (1930) 翌々年まで中国各地でスケッチ旅行をする。  
昭和 9 年 (1934) 帝国美術展で特選となる。  
昭和 10 年 (1935) 名を章 (アキラ) から一章 (カズアキラ) へ変更する。  
昭和 11 年 (1936) 帝国美術展で無鑑査となる。  
昭和 20 年 (1945) 東京の東中野から岡山市弓之町へ転居し、合同新聞社の嘱託となる。  
6 月、応召され九州、大村の部隊に配属される。  
10 月、除隊となり帰宅する。  
11 月、合同新聞に連載コラム「復興 岡山」を執筆する。  
昭和 21 年 (1946) 第一回日本美術展 (日展) に出品する。しばらく浅口郡里庄町に移る。  
昭和 22 年 (1947) 日展審査員となる。秋から日展の岡山誘致のため関係方面と折衝する。  
昭和 23 年 (1948) 天満屋百貨店を会場に日展が開催される (以後岡山で四年連続開催)。  
昭和 24 年 (1949) 東光会で洋画講習を行う (昭和三四年まで)。  
昭和 25 年 (1950) 岡山大学教育学部美術科教授に就任する。  
昭和 30 年 (1955) 天満屋百貨店で個展を開催する。岡山大学教授を辞し、川崎市に移る。  
昭和 33 年 (1958) 日展評議員となる。  
昭和 34 年 (1959) 東光会代表となる。  
昭和 35 年 (1960) 病のため国立大蔵病院で死去する。

※本書 5 ページに挙げた諸文献の年譜を参考に、本展への関係箇所を中心に抄出しました。

※佐藤一章の名の読みは、主要な人名辞典でもしばしば「イッシュョー」となっていますが、出生時の本名は章 (アキラ) で、昭和 10 年から他に混同されやすい氏名の画家があったため一章 (カズアキラ) としています。本展で紹介する昭和 20 年 11 月の合同新聞の連載コラムには「一あき」と署名しています。



戦災後の丸の内地区

正面は池田家事務所のあった台地の石垣。その先遠くの左には岡山城の月見櫓が小さく見え、右には岡山城の天守閣が焼失したあとの本丸の「上の段」の石垣が見えます。撮影は松浦硯二氏。岡山市立中央図書館所蔵のプリント。

## 合同新聞の連載コラムと水彩スケッチ

戦時中は一般に、従軍画家として報道機関に勤める画家が多くありました。そのことと関係あるか明確ではありませんが、激しい空襲を避けて東京から岡山へ移り住んだ佐藤は、一紙一県と言論統制政策のもとで岡山県下を販売域としていた合同新聞社に嘱託として勤めるようになり、戦争末期の応召と終戦後の兵役解除を経て帰宅してからも、合同新聞社に籍を置いたまま新聞紙面に載せる挿絵などを担当していました。

昭和20年11月の合同新聞には、佐藤が描いたスケッチに、本人自身の執筆による短い解説文を添えた「復興 岡山」と題したコラムが、13回にわたって掲載されました。このことから、戦後の岡山市街を描いたスケッチの多くは新聞社から画家へ委嘱された仕事に應えるためのものであって、当初から連載を予定して描かれたとするのが、まずは可能な推測かも知れません。しかし、敗戦後のこの時期にあたって、すっかり変貌した市街の様子に心を動かされた画家が、眼前の風景を描き、記録して留めておきたいという気持ちに駆られて自発的にスケッチを始めたところ、新聞社の目にとまったか、あるいは画家自身からの発案によってか、コラムとして連載される運びになった、という可能性も排除することはできないように思われます。いずれにせよ、掲載が実現するまでの詳細な事情に関しては、今では確実なことがわからなくなっているので、今後の新資料の発見には希望をつなぎつつも、さしあたりは詮索することが困難になっています。

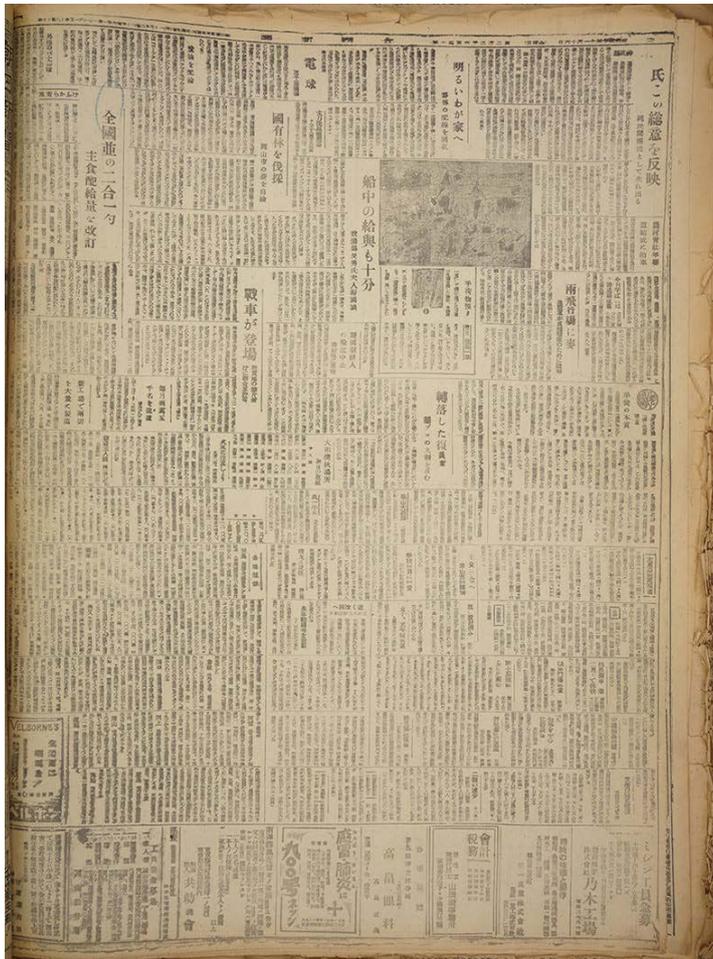
というわけで、スケッチを描き始めた具体的な動機は詳しくわかりませんが、スケッチに込められている作者の考えや思いを窺い知るには、この連載コラムに添えられた画家本人の文から、数々の手掛かりが読み取れることと思われます。

この連載の中で画家は、敗戦後の社会を襲った極度の混乱と窮乏や、それらからくる絶望的な虚無感の中でも、人々が懸命に生きようとする姿を語っています。表題にもあるとおり、復興への希望と、ゆっくりでも力強い歩みこそが、画家がその眼で捉えようとした大切な何かであると感じられてきます。彼は、モラルを失って退廃した人心に対して、時には痛烈な皮肉を交じえて辛辣な言葉を投げかけていますが、そのことが逆に、社会と文化とモラルの復興へ寄せる、彼の強い思いと期待を滲ませています。

しかし一年々々と時が経過するうちに、やがて各地には再建の槌音が響きわたるようになり、戦後の社会は少しずつ落ち着きを取り戻して行きました。佐藤一章が昭和23年の日展の岡山誘致や、昭和25年から新設の岡山大学において美術科教授として教鞭を取り、後進の育成にあたったことは、戦後の岡山の文化の発展に大きい役割を果たしましたが、そのことも考え合わせると、すでにこのスケッチの中にも彼が復興へ寄せていた憧れるような強い気持ちがかもっており、困難な社会の況の中で時には如何ともなし難いもどかしさに耐えながら、それが静かに胚胎していたことが伝わってきます。

なお、戦災を記録した資料の有限性を思うと、ずっと後年になってから昔を回想して描かれた絵画であっても、そこには貴重な情報が盛り込まれているし、長い年月を経て記憶が整理されるという利点もあるといえます。しかし佐藤一章の一連のスケッチは、昭和20年秋という時点で画家自身が身を置いて、直接眼にした現実の光景をその時に描いたものである、という即時性を備えているのが特徴で、そのときの写生だけが放つ臨場感を、いつまでも失うことがありません。

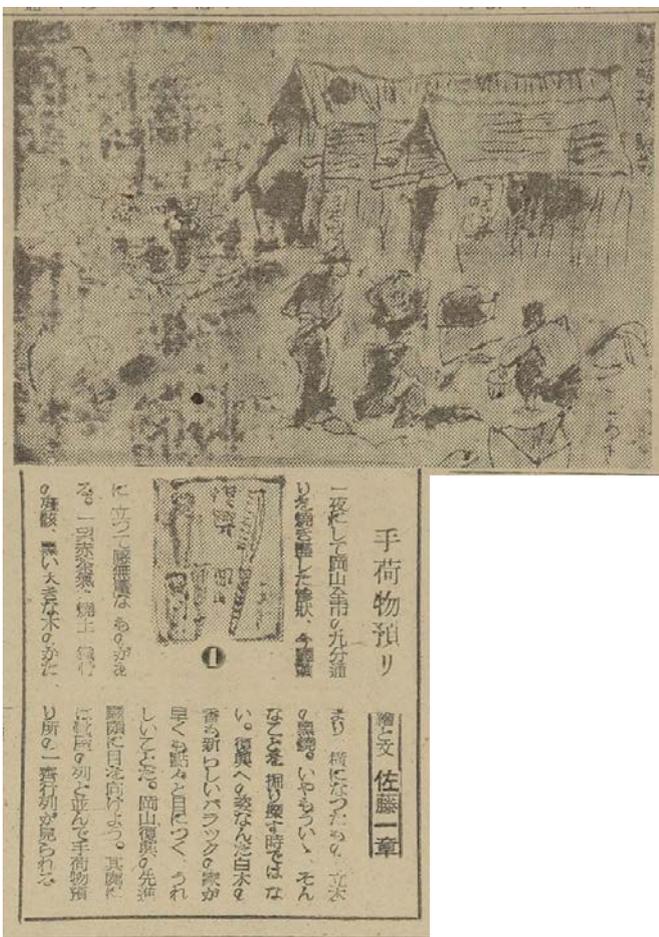
水彩スケッチと合同新聞のコラムの関連性について最初に取り上げられたのは、令和元年(2019年)に岡山シティミュージアムで開催された「第42回岡山戦災の記録と写真展」であり、このときは岡山市立中央図書館の協力で水彩スケッチの全点が出品され、新聞コラムのテキストが添えられました。今回の図書館における紹介は展示の規模こそ小さいですが、スケッチの所蔵先が内容分析をさらに進め、あらためて詳しく紹介しようとするものです。



左の図版は、佐藤一章の連載コラム「復興岡山」の第1回が掲載された、昭和20年11月16日付けの合同新聞の紙面（第2面。岡山市立中央図書館所蔵の原紙）の全体です。中央よりやや右寄りの、上から3段目と4段目に挿絵が、5段目と6段目に文が掲載されています。

合同新聞社は6月29日の岡山空襲で被災し、印刷工場が全焼したため、事前に契約を結んでいた民間の工場を借りて発行を続けましたが、用紙の欠乏から政府の統制で発行にも制限があり、1枚の紙の表と裏だけ（第1面と第2面のみ）の紙面であるほか、都市爆撃に備えて協定を結んでいた朝日新聞と毎日新聞の紙面の一部に記事が掲載される場合もありました。

紙面から気づくのは、当時は金属の欠乏から古くなった活字を使用し続けており、摩耗してインクが紙に写らず読みづらい文字や、文字が抜けて空白になった箇所が多いことです。このたびコラムの文を書き起こすにあたり、以上の理由から判読が困難な文字があり、潰れていて読み取れない文字は□で、抜けている文字は空欄のままです。



手荷物預り（第一回 十一月六日）

一夜にして岡山全市の九部通りを焼き尽した惨状、今駅頭に立つて感無量なものである。一望赤茶けた焼土、鉄骨の残骸、黒い大きな木のかたまり、横になつたもの、立木の黒焼。いやもういゝ、そんなことを掘り探す時ではない。復興への姿なんだ白木の香も新しいバラックの家が早くも点々と目につく、うれしいことだ。岡山復興の先進駅頭に目を向けよう。其処には靴屋の列と並んで手荷物預り所の一斉行列が見られる。

手荷物預り 佐藤一章

一夜にして岡山全市の九部通りを焼き尽した惨状、今駅頭に立つて感無量なものである。一望赤茶けた焼土、鉄骨の残骸、黒い大きな木のかたまり、横になつたもの、立木の黒焼。いやもういゝ、そんなことを掘り探す時ではない。復興への姿なんだ白木の香も新しいバラックの家が早くも点々と目につく、うれしいことだ。岡山復興の先進駅頭に目を向けよう。其処には靴屋の列と並んで手荷物預り所の一斉行列が見られる。

代用食有ます (第二回 一月一七日)

駅頭の物凄い混雑は夫々電車に吸込まれて終ふ。夫れも朝夕の定石らしい。靴屋の行列は人で一杯だ。思ひ切つて横丁へ抜け出て見ると此処も相変らずの人のあさり顔が目につく。皆々何かを求める目、目、目、あゝやつぱり食べものなんだなあと気が付く。それも其管表通りに一軒のそれらしい家も見当たらないんだもの。見付かつた、人が続いてゐる。入口に「代用食有ます」二枚の粗末な看板が掲げてある。裏の露天では家婦が今しもに焚に急がしい様子である。



**代用食有ます** 繪文 佐藤一章

駅頭の物凄い混雑は夫々電車に吸込まれて終ふ。夫れも朝夕の定石らしい。靴屋の行列は人で一杯だ。思ひ切つて横丁へ抜け出て見ると此処も相変らずの人のあさり顔が目につく。皆々何かを求める目、目、目、あゝやつぱり食べものなんだなあと気が付く。それも其管表通りに一軒のそれらしい家も見当たらないんだもの。見付かつた、人が続いてゐる。入口に「代用食有ます」二枚の粗末な看板が掲げてある。裏の露天では家婦が今しもに焚に急がしい様子である。

目、目、あゝやつぱり食べものなんだなあと気が付く。それも其管表通りに一軒のそれらしい家も見当たらないんだもの。見付かつた、人が続いてゐる。入口に「代用食有ます」二枚の粗末な看板が掲げてある。裏の露天では家婦が今しもに焚に急がしい様子である。

乗合自動車動く (第三回 一月一八日)

此頃の列車の凄い人はまるで生地獄の感がする。これも近く多少の緩和を見るらしいが気休め程度に終らないことを念願する次第。これと併行して混雑そのものゝ姿が電車に自動車と言ふ乗物に見られるのである。いづれ追つて和らぐこと、思ふがごと、駅前地方行乗合の行列 バラクに見る肋骨だけの家一軒 あたりは赤茶気た残骸の静けさと比較してあまりにも正反対の形相に気が付いたのであつた。



**乗合自動車動く** 繪文 佐藤一章

此頃の列車の凄い人はまるで生地獄の感がする。これも近く多少の緩和を見るらしいが気休め程度に終らないことを念願する次第。これと併行して混雑そのものゝ姿が電車に自動車と言ふ乗物に見られるのである。いづれ追つて和らぐこと、思ふがごと、駅前地方行乗合の行列 バラクに見る肋骨だけの家一軒 あたりは赤茶気た残骸の静けさと比較してあまりにも正反対の形相に気が付いたのであつた。

此頃の列車の凄い人はまるで生地獄の感がする。これも近く多少の緩和を見るらしいが気休め程度に終らないことを念願する次第。これと併行して混雑そのものゝ姿が電車に自動車と言ふ乗物に見られるのである。いづれ追つて和らぐこと、思ふがごと、駅前地方行乗合の行列 バラクに見る肋骨だけの家一軒 あたりは赤茶気た残骸の静けさと比較してあまりにも正反対の形相に気が付いたのであつた。



ソバは実る

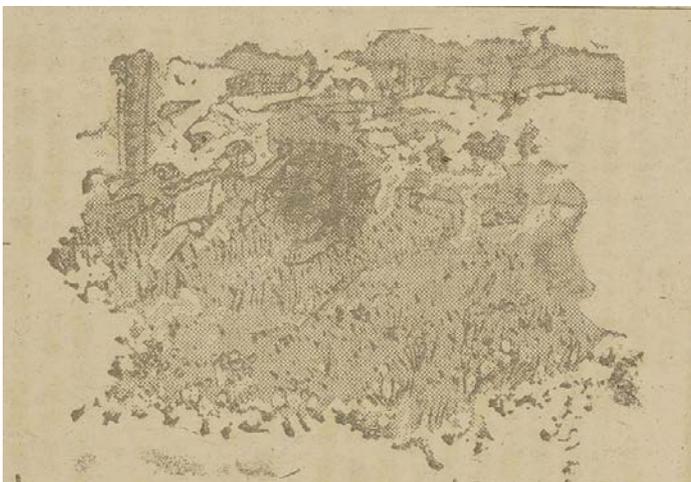
柳川付近



「ソバは実る 柳川付近」

第4回の新聞連載（11月19日）に同じ構図の挿絵が掲載されています。

空襲で建物が焼失したため遠くの山並みが見渡せる中で、かつて市街地の中心部であった柳川筋付近の土地が、食糧難からソバ畑になっています。新聞連載の文では、ソバの実や花の可憐な姿の中に、生への希望が綴られています。



家と蕎麦は實る（第四回 一月一九日）

この焼原に詩的ななんて叱られるかも知れないが、こゝ柳川交叉点近く和やかな気分そのものに浸る一角がある。鉄棒のひんまがつたも自転車も焼かれた□□ 針金のいやに巻きつく夫等がこんがらがって横たはつてゐる。前に静かに実る蕎麦の花とその蕾の色よよ、実に奇麗だ 弱々しい中に生への力強さを感じる。

四五人が後方を歩るく、遠山を背負つて立上る家の続きが見られるのである。

家と蕎麦は實る 柳と文佐藤一章

この焼原に詩的ななんて叱られるかも知れないが、こゝ柳川交叉点近く和やかな気分そのものに浸る一角がある。鉄棒のひんまがつたも自転車も焼かれた□□ 針金のいやに巻きつく夫等がこんがらがって横たはつてゐる。



前に静かに実る蕎麦の花とその蕾の色よよ、実に奇麗だ 弱々しい中に生への力強さを感じる。

四五人が後方を歩るく、遠山を背負つて立上る家の続きが見られるのである。

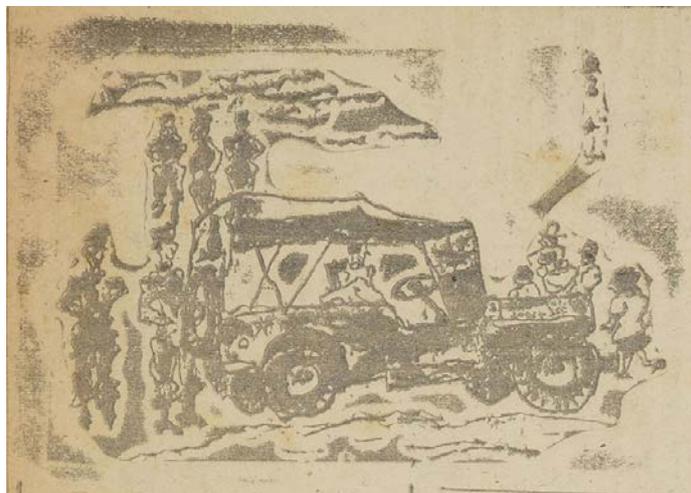
四五人が後方を歩るく、遠山を背負つて立上る家の続きが見られるのである。



「ジープ止る」

これと同様の主題の挿絵が掲載された第5回の連載(11月20日)には、敗戦で退廃した人心を嘆く言葉が綴られています。水彩スケッチでは登場人物が少なく、群がって駆けつける様子ではありませんが、新聞の挿絵では幌つきのジープを兵士も含めて多数の人が囲んでいます。

スケッチからは、ジープの車体の鋭角的なデザインと、きらきらした金属感や、タイヤのどっしりした様子が伝わってきます。



**止るジープ** 續々 佐藤一章

敗戦の結果は、この岡山にも相当数の米こく軍の平和進駐を見た。今し「ジープ」は止つた。一斉に群がる男女大小の□ 如何にも物珍しさう、物欲しさうである。態度がいけない。あんぐりあいた口、何時までも離れない。こんなに暇なわけはない筈だ。もつともつと忙しい今日ではあるまいか。午後の散策 □用殆どジープによるらしい、近代の形と色の良さは認めるに各でない。

敗戦の結果は、この岡山にも相当数の米こく軍の平和進駐を見た。今し「ジープ」は止つた。一斉に群がる男女大小の□ 如何にも物珍しさう、物欲しさうである。態度がいけない。あんぐりあいた口、何時までも離れない。こんなに暇なわけはない筈だ。もつともつと忙しい今日ではあるまいか。午後の散策 □用殆どジープによるらしい、近代の形と色の良さは認めるに各でない。

止るジープ (第五回 十一月二〇日)

敗戦の結果はこの岡山にも相当数の米こく軍の平和進駐を見た。今し「ジープ」は止つた。一斉に群がる男女大小の□ 如何にも物珍しさう、物欲しさうである。態度がいけない。あんぐりあいた口、何時までも離れない。こんなに暇なわけはない筈だ。もつともつと忙しい今日ではあるまいか。午後の散策 □用殆どジープによるらしい、近代の形と色の良さは認めるに各でない。



「柳川 ダンスホール前」

桃色の門柱の前に4人の和装の女性が佇んで、囁くような会話をしています。3人は横顔や背面から描かれ、ひとりひとりの仕草が巧みに捉えられています。第6回の連載（11月21日）の挿絵では、進駐軍兵士など多数の来店客でホールの門前が混み合う様子が表されています。



ダンスホール前 第六回 二月二日

遠くで見るとまるでみられない。たゞ広い、□のおちつかぬ建物が岡山第一のダンスホール場らしい。得てバラック式は水物に限るやうだ。今の場合無理からぬ事だが、もつと外装の美てき効果をねらつたらこんなにもなかつたらうと考へられる。正面の桃色の柱、植木の□鉢、その間を彷徨するダンサーと彼等進駐軍 日本風を好きらしいが彼女等は和装に身□、一人の洋装を見受けないことだ。中へ這入つたことがないから殆ど申されないが何れにしてもサービスに余念がない

ダンスホール前 第六回 二月二日

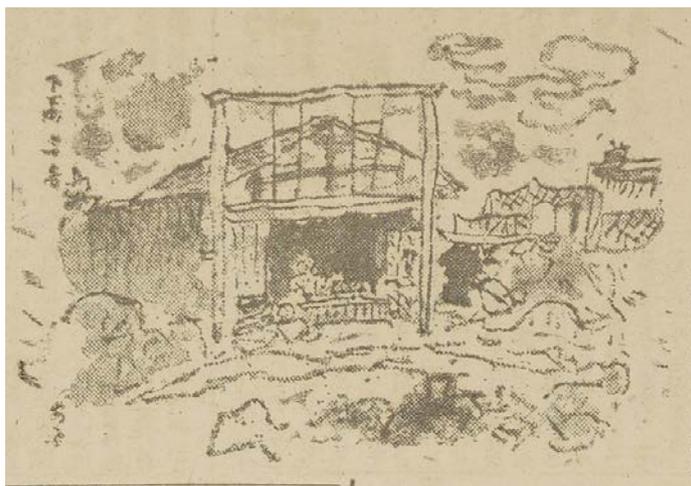
遠くで見るとまるでみられない。たゞ広い、□のおちつかぬ建物が岡山第一のダンスホール場らしい。得てバラック式は水物に限るやうだ。今の場合無理からぬ事だが、もつと外装の美てき効果をねらつたらこんなにもなかつたらうと考へられる。正面の桃色の柱、植木の□鉢、その間を彷徨するダンサーと彼等進駐軍 日本風を好きらしいが彼女等は和装に身□、一人の洋装を見受けないことだ。中へ這入つたことがないから殆ど申されないが何れにしてもサービスに余念がない



今のセントラル付近の  
早店 狩谷商店

「今のセントラル付近の早店 狩谷商店」

一面の焼け跡とその残骸の中に、真新しい材木で商店が建てられ、営業を始めているところ。第7回の連載（11月22日）の文では、店開きをした商店主について牧歌的な明るい調子で言及しています。表題にある「セントラル」とは、この付近でもまもなく開業した映画館のことです。



**下之町早店** 陶匠 佐藤一章

下之町横丁に  
早くから店を  
開くハツチ屋が  
式くわい軒らしい。松皮の  
屋根に小ぢな  
な店にをさる主人一人。  
間を置いて7分三三五  
今は店先に鳥居ならぬ柱が  
組きつて突立つて見える。  
細い縦木や横木を入れてあ  
るところから近々大きな  
看板でも張る仕組なんぢら  
う。さながら焼焦の山を他  
所に悠々然と見えた。

下之町横丁に早くから店を開くバラック屋がある。株式くわい社らしい。松皮の屋根に小ぢなまりした恰好な店にをさる主人一人。間を置いての客の三々五々。今は店先に鳥居ならぬ柱が組あつて突立つて見える。細い縦木や横木を入れてあるところから近々大きな看板でも張る仕組なんぢらう。あたりの焼焦の山を他所目に悠々然と見えた。

下之町早店（第七回 十一月三日）



### 「旭川畔に野菜を作る」

これは新聞連載に使用されなかった主題を描いたスケッチですが、全体をおもに寒色系の色彩でまとめて、その中でも子どもの頭巾などに使用した紺色が爽やかに引き立つ作品です。

岡山市の中心市街を縦貫する旭川の広い河原の一角で、粗末な杭と紐で土地を囲んで畑を作り、母親とみられる人物が、かがみ込んで食糧にするための野菜を育てています。川岸へ降りて行く曲がりくねった小路には、ひとりの子どもが佇んでおり、日除けのためか、防空頭巾のようなものを被って、少しうつむいてその姿を見つめています。

遠くの岸边には、小舟を扱う人々の姿がみられます。

## 佐藤一章と戦後の岡山の文化

佐藤一章のスケッチは、赤と緑、青と黄色、といった、互いに引き立て合って鮮やかに見える補色の関係を生かしながら、大胆な色彩の用い方がなされており、構図の工夫によって全体の統一感が醸し出されるバランス感覚にも欠けるところがありません。こうした作画上のしっかりした基礎の上に立ちながら、画面にさらに魅力を添えているのは、食糧難から市街地がソバや野菜の畑になっている状況や、進駐軍兵士のジープへ駆け寄る人々、賑わう夜のダンスホールの様子や、急ピッチで進められている建設作業など、戦災直後の市街をありのままに活写した、同時期の写生だけがもつ臨場感です。

極度の社会の混乱は翌年まで続きますが、やがて少しずつ落ち着きが戻ってきます。佐藤は里庄町の親類のもとでしばらく静養し、軍隊生活以来、疲れ切っていた身体を休ませて、英気を養いました。そして昭和21年には戦後第1回の日展が東京・上野で開催されたので、作品を出品しました。

そして昭和22年には、それまで東京と京都以外の地方で開催されたことのない日展を岡山へ誘致できないかと、岡山県社会教育課や合同新聞社の間で検討が始まりました。そのためには文部省など多くの関係先と折衝できる人材が、ぜひとも必要でしたが、日展の事情に深く通じており、合同新聞社にも在籍していた佐藤一章へ、その年の秋に社長の谷口久吉から相談がありました。この依頼を受けて交渉役を快く引き受けた佐藤の渾身の努力によって、それから日展の誘致は具体化し、戦災による損傷を応急修理したばかりの天満屋百貨店本館を会場にして、この全国規模の公募展は昭和23年1月に岡山で開催されました。始まってみると会場には延べ数十万人の入場者が詰めかけ、入場券を求める長い行列が城下筋や新西大寺町筋まで続くこともあったと伝えられています。

日展はこのときから4年間、連続して岡山で開催されることになり、この機会に地元の岡山からも多くの画家が出品して認められ、活躍するようになりました。

そして佐藤一章は、昭和25年には新設されたばかりの岡山大学へ美術科の教授として迎えられ、以後5年間にわたり熱心に後進の指導にあたりました。さらに岡山に日展系の画家たちの活動の場として東光会の支部を組織しました。

最後に、このスケッチと岡山市立図書館の関係についてですが、昭和20年の岡山空襲で罹災した岡山市立図書館は、戦後の再建過程で幾度も移転を重ねており、そのためか戦後の早い時期の収蔵資料には経緯の詳細が辿れなくなっているものも多く、佐藤のスケッチも例外ではありません。判明している限りでは、昭和40年に岡山市立図書館が、当時は下石井公園内にあった本館の建物で、戦災二十周年を記念する展覧会を開催したときの出品記録に、このスケッチも岡山市立図書館の所蔵品として記載されています（本書26ページ）。佐藤は昭和30年に岡山大学教授を辞して川崎市へ転居し、昭和35年には同地で歿したので、収蔵のとき本人と直接の交渉があった場合は、それより遡る時期のことになります。

これまで図書館では、このスケッチを岡山空襲による被災と戦争の惨禍を伝える資料として紹介してきました。もちろんこのことはスケッチの重要な一面を捉えており、悲惨な戦争を二度と繰り返さないためにも、スケッチのそうした価値が失われることはありません。

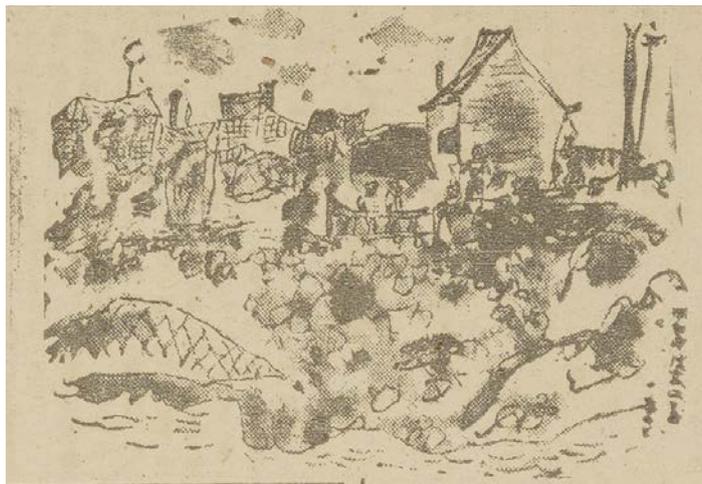
しかしこの画に込められている内容は、おそらくそれだけにとどまるものではありません。敗戦の衝撃から立ち直ろうとしているこの時期に、画家は焼け跡の中で必死に生きる人々の姿を見つめ、復興への動きに耳を澄まし、その着実な足取りを捉えようとしています。ときには辛辣な言葉で退廃に陥りがちな人の心を奮い立たせ、文化の再建へ努力を向けるように呼びかけをしています。

このスケッチは、戦後の岡山で日展の開催などを通じて活躍した佐藤一章の、社会的な活動も考え合わせながら、画家の生涯の中で内容理解を進めることも大切です。



「中島は立上る」

旭川の中洲に広がる中島の町は、江戸時代から水陸の交通の要所で、むかしは旅籠が並び、芝居や遊郭で賑わってきました。画面は、やや右の焼け残った古い土蔵をよそに、人々が立ち歩き、遠方には真新しい家が続々と建ち始める様子です。転変を繰り返す人の営みを、旭川の水の流れが巡っています。ほぼ同一構図の挿絵が第9回の連載（11月24日）にも使用されています。



**中島は立上る** 第九回 佐藤一章

旭川東岸の遊郭一帯を探つて見た。すっかり焼尽くされた遊び場は、早くも家並おいて市中一番の復興振り、とんとん同じやうな家が立並びはじめた。しかも数が多く手早いところを見せてゐるのはさすがだと思つた。何でもいい早い早い督促で職人達の吸収も、帰相場が考へられてくる。戦後サービスマンも注ぐ今日は一日でも早く営業開始を望むもの、恐らく業者自身のみではない筈だ。

中島は立上る（第九回 一月二四日）

旭川東岸の遊郭一帯を探つて見た。すっかり焼尽くされた遊び場は、早くも家並おいて市中一番の復興振り、とんとん同じやうな家が立並びはじめた。しかも数が多く手早いところを見せてゐるのはさすがだと思つた。何でもいい早い早い督促で職人達の吸収も、帰相場が考へられてくる。戦後サービスマンも注ぐ今日は一日でも早く営業開始を望むもの、恐らく業者自身のみではない筈だ。

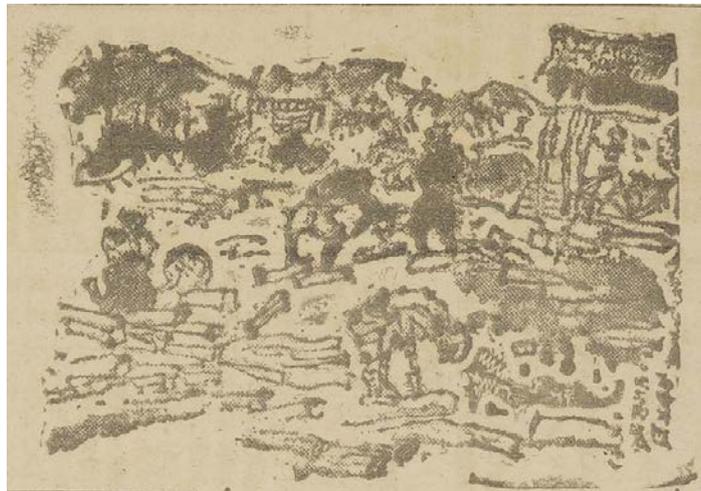


### 「旭川河畔 中島風景」

第9回の連載（11月24日）では、かつて遊郭街であった中島の町の復興の早さが、少しの皮肉も交じえて語られていました。

同じ町を、先のととは別の方角から描いたこのスケッチでは、真新しい材木を使って建物が続々と建てられている様子が、昼らしい明るい光の中に色鮮やかに、力強く表現されています。その前に広がる赤茶けた色彩の戦災の焼け跡と、その手前の草むらの黄緑色や、遠くの山並みと最も手前の川に用いられている深い緑色との対比が鮮やかで、このスケッチの画面を印象深くしています。

ここでも悠然と広がる青空や山や川と、変転する姿を見せながら活気を帯びつつある市街の対比が、工夫されています。



瓦町附近大工の仕事場 (第八回 一月三日)

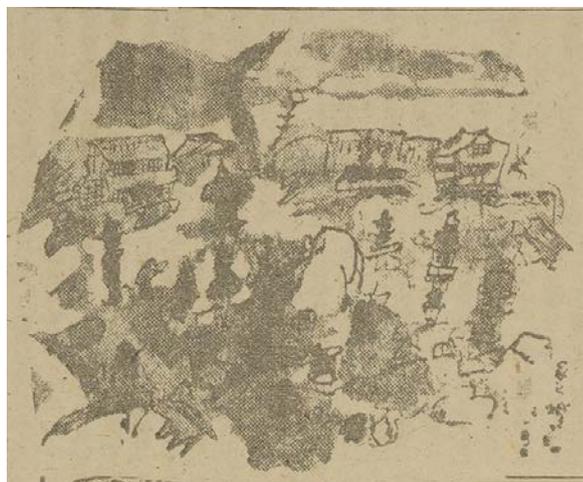
復興の旺盛気分を満腔する所に瓦町附近一帯がある。大工達は今忙しい。鋸で引くもの、鑿を打ち込む姿、鉋を使ふもの、皆々とりどり一所懸命である。こちらの一群に一休みする数にん、他の一群に竹材を整理をする数にんこちらもスケッチに余念が無い。

とうとうとう彼等に見付かつて終つた。竹の連中腰を上げてぞろぞろとやつて来る。お前さん、それ描かれたんだよ、之れがよー手をぐわ面の上ののそつと突出す。それは太い頑丈な黒い手で今にもぐわ面は汚れさうになつた

瓦町附近大工の仕事場

佐藤一章

休まる暇にん、他の一群に竹材を整理する数にんこちらもスケッチに余念が無い。とうとうとう彼等に見付かつて終つた。竹の連中腰を上げてぞろぞろとやつて来る。お前さん、それ描かれたんだよ、之れがよー手をぐわ面の上ののそつと突出す。それは太い頑丈な黒い手で今にもぐわ面は汚れさうになつた。



家と燈籠 (第一〇回 一月二五日)

市中至るところ 多くの燈籠を見受けることは岡山人の趣味の程を思はせてなつかしい。こんな も岡山の石燈籠があつたのかと驚かされる。細いの、太いの、背の高いの、低いの、仲々面白い形が沢山ある。横倒れのもの一つもない。又形も以前のまゝの姿であるのは矢張石と言ふ材料からくるので之れが余のものだつたらまるでだらしな形相 なり終つてみたことだらう。「家と燈籠」燈籠林立するパツク 復興の家が見える。

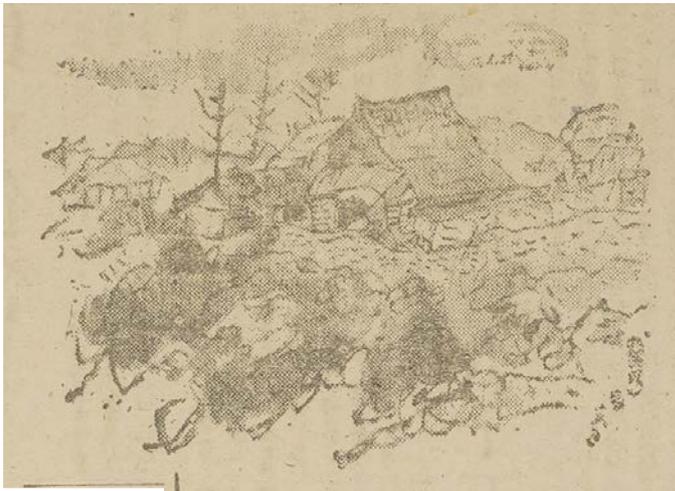
家と燈籠

佐藤一章

市中至るところ 多くの燈籠を見受けることは岡山人の趣味の程を思はせてなつかしい。こんな も岡山の石燈籠があつたのかと驚かされる。細いの、太いの、背の高いの、低いの、仲々面白い形が沢山ある。横倒れのもの一つもない。又形も以前のまゝの姿であるのは矢張石と言ふ材料からくるので之れが余のものだつたらまるでだらしな形相 なり終つてみたことだらう。「家と燈籠」燈籠林立するパツク 復興の家が見える。

北方の家 (第二回 十一月二七日)

日赤本社も今はダンスホール場と化して終つた。直前北方を眺むるときそこは珍らしい北国風の新しい家が目とまる。此処の主人は恐らく北国人、違ひない。周囲の焼残りの黒い立木と相俟つて北国其まゝな異国景の現出低く垂れ下つた軒先、廻りを取りかこむ風除けのくねくねした長い厚い土塀、入口は小さい。屋根は小石を載せて全く関東できカラー、富んだ仕組であらう。



日本社も今はダンスホールと化して終つた。直前

北方の家

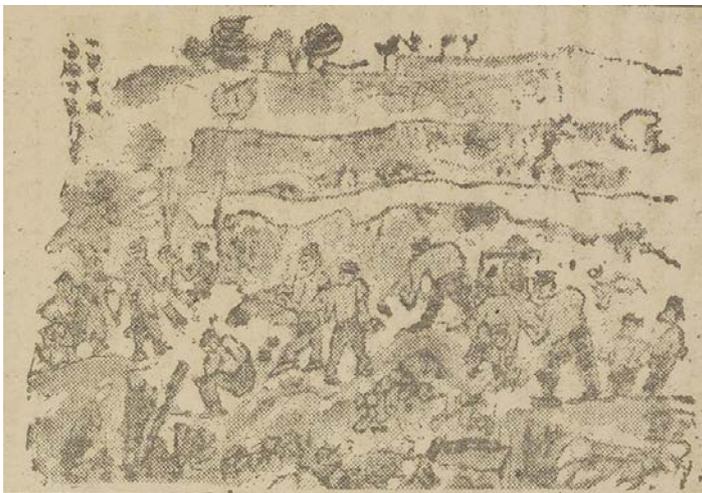
繪と 佐藤一章



北方を眺むるときそこは珍らしい北国風の新しい家が目とまる。此處の主人を恐らく北国人、違ひない。周囲の焼残りの黒い立木と相俟つて北国其まゝな異国景の現出低く垂れ下つた軒先、廻りを取りかこむ風除けのくねくねした長い厚い土塀、入口は小さい。屋根は小石を載せて全く関東できカラー、富んだ仕組であらう。

露天教育 (第二回 十一月二八日)

門衛ならぬ教員室、意外にもそれは自動車庫だつたことに気がついたが案内を乞ふて生徒の作げふ振りをスケツチさして頂きたい旨を述べる、午後の作げふ時にしてほしい今生徒は上で授げふちゆうなんですからと話された。さて何処が教室なのか、自分は高い台地に昇つて露天教室の實際に触れた瞬間気毒さで一杯になる。作げふ場も矢張り立派な教室なんだ。生徒の働らく姿は様々のポーズを見せて、そこを突風が吹き去るとき赤い焼土は砂煙りを立て、飛んでいった。



門衛ならぬ教員室、意外にもそれは自動車庫だつたことに気がついたが案内を乞ふて生徒の作げふ振りをスケツチさして頂きたい旨を述べる、午後の作げふ時にしてほしい今生徒は上で授げふちゆうなんですからと話された。さて何処が教室なのか、自分は高い台地に昇つて露天教室の實際に触れた瞬間気毒さで一杯になる。作げふ場も矢張り立派な教室なんだ。生徒の働らく姿は様々のポーズを見せて、そこを突風が吹き去るとき赤い焼土は砂煙りを立て、飛んでいった。

げふ時にしてほしい今生徒は上で授げふちゆうなんですからと話された。さて何処が教室なのか、自分は高い台地に昇つて露天教室の實際に触れた瞬間気毒さで一杯になる。作げふ場も矢張り立派な教室なんだ。生徒の働らく姿は様々のポーズを見せて、そこを突風が吹き去るとき赤い焼土は砂煙りを立て、飛んでいった。



### 「弓之町付近」

佐藤一章の家は、市街の中心部からやや北寄りの、弓之町にあった憲兵隊の庁舎（現在の就実高校の体育館がある場所）の付近にありました。そのため昭和20年6月29日の岡山空襲では、辛うじて罹災を免れています。

このスケッチには、そこから北方へ続く、戦災で失われなかった古い街並みが残る界隈が描かれています。ただし右手に大きく立っている少し斜めになった円柱は神社の鳥居の一部にも見え（あるいは電柱かも知れませんが）、それならば表題とは異なり、弓之町より少し北方の、伊勢宮などがあつた番町（旧町名は小畑町）の一隅を描いたものかも知れません。彼の家を起点にして行動範囲を考えるなら、表題と齟齬があつても説明が成り立たなくはありません。

このスケッチには、建物が重なってできる街並みの奥行き感があり、細部を見てゆくと、昔から続いてきた街の中にある灯籠や植栽などの、心和むような景物が描かれています。



備前焼見物 二十、十一、



「備前焼見物 二十、十一、」

最後の新聞連載（第13回、11月29日）と同様の主題（内容は少し異なる）のスケッチです。左端の「二十、十一、」の書入れは制作時期で、昭和20年11月を指すと思われます。

後楽園の前にかかる鶴見橋のたもとには国粋堂という備前焼の店がありました。付近の出石町一帯とともに戦災を免れ、営業を続けて土産物を求める進駐軍兵士も多く立ち寄りしました。ほの暗く奥まった店内や、すらりと身長の高い兵士たちの仕草など、画家は場の一瞬の雰囲気をつまえています。同様の主題のスケッチが、やかげ郷土美術館にも所蔵されています（5ページの参考文献中、『やかげ郷土美術館蔵品目録』などに掲載）。



**備前焼をぞく** 論 佐藤一章

古来の伝統を続ける備前焼は、破綻はこれか、形、形、ひ日本風の珍しい陶器として眺められるのか、求めるのか、毎日ひつきりなしたさうだ。

今日も、もう数名の進駐軍が店先に現れて、おちこちと見廻つてゐる。彼等もそれに気がついて自分の側に突立つた。につこり突つての挨拶である何を言合つてゐるのか解らないが、然してこゝにも平和的の大きな交離がある。

古来の伝統を続ける備前焼は、破綻はこれか、形、形、ひ日本風の珍しい陶器として眺められるのか、求めるのか、毎日ひつきりなしたさうだ。

今日も、もう数名の進駐軍が店先に現れて、おちこちと見廻つてゐる。彼等もそれに気がついて自分の側に突立つた。につこり突つての挨拶である何を言合つてゐるのか解らないが、然してこゝにも平和的の大きな交離がある。

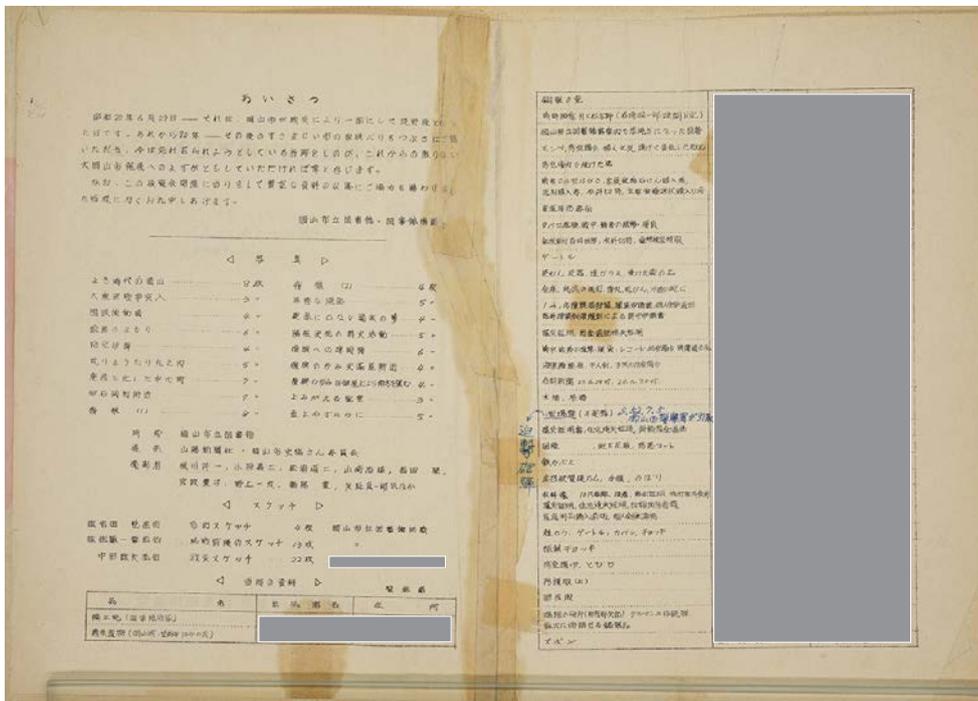
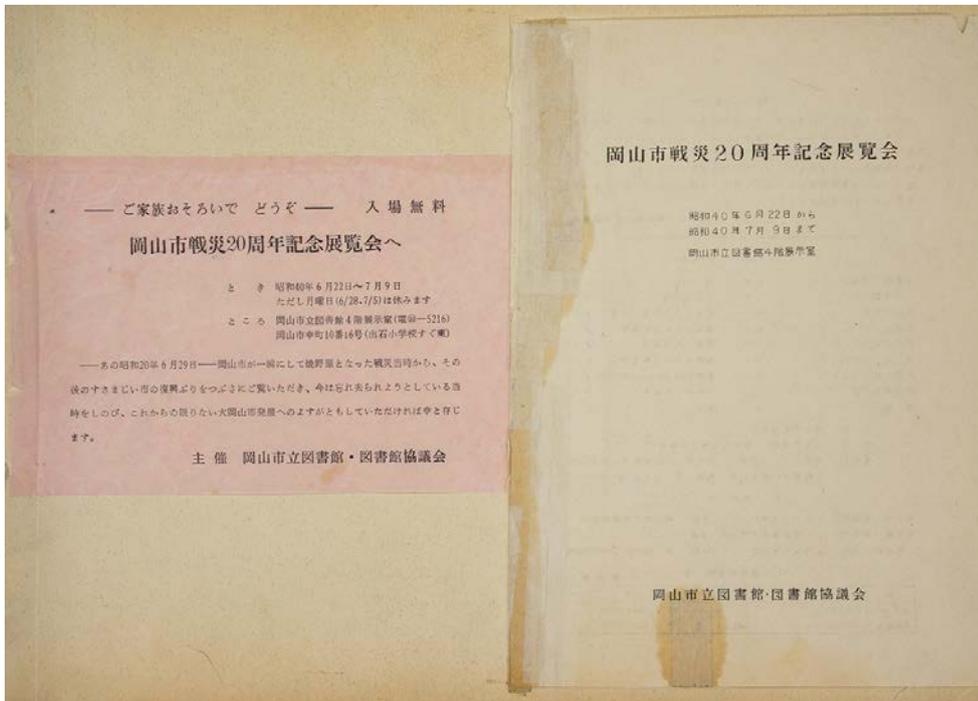


13

備前焼をのぞく  
（第三回 十一月九日）

古来の伝統を続ける備前焼は彼等にはこれが色、形といひ日本風の珍しい陶器として眺めるのか、求めるのか毎日ひつきりなしたさうだ。

今日も、もう数名の進駐軍が店先に現れて、おちこちと見廻つてゐる。彼等もそれに気がついて自分の側に突立つた。につこり突つての挨拶である何を言合つてゐるのか解らないが、然してこゝにも平和的の大きな交離がある。



(参考)「岡山市戦災 20 周年記念展覧会」の出品目録

昭和 40 年に、当時は現在の岡山市北区の下石井公園内にあった岡山市立図書館の 4 階で開催された戦災二十周年を記念する展覧会の目録です。これについては今回実物を展示していないので、ここに参考として画像を掲出しますが、図書館の記録として保存しており、現在のところは利用登録がなされていない資料です。このとき借り受けるなどした資料の情報で個人にかかわる部分は灰色で遮蔽しています。

展示品の内容(下の図)をみると、左ページの下方に「故佐藤一章画伯 終戦前後のスケッチ 13 枚 岡山市立図書館所蔵」と記されています。岡山市立図書館では戦後、戦災資料の収集と紹介に努めてきましたが、これは判明している中では図書館におけるスケッチの最も古い記録です。

企画展示

敗戦後の岡山 佐藤一章が描き残したスケッチ

解説図録

発行日 2024(令和6)年8月20日 (発行時点では電子版のみの発行です)

発行 岡山市立中央図書館

〒700-0843 岡山県岡山市北区二日市町56番地

電話 086-223-3373

執筆 飯島章仁(岡山市立中央図書館学芸副専門監)

**岡山市立中央図書館**